

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「復興のシンボル」

広島県 呉市立天応学園 8年 豊島 かのあ 叶愛

2018年、私の暮らしている地域・天応では西日本豪雨の影響で土砂災害が発生しました。7月6日、その夜も私は家族と一緒に夜ご飯を食べていました。雨がひどいなとは思っていましたが家族と一緒にいるせいか、その時の私に「避難しよう」という考えはありませんでした。しかし突然車のクラクションが鳴り始めました。鳴り止まない大きな音を怪訝そうに父は外へ様子を見に行きました。「強い雨の音」と「車の大きなクラクションの音」に当時小学3年生の私は恐怖しありませんでした。

「避難しよう。」

それが戻ってきた父の第一声でした。私の家の前では持ち主のわからない車が土砂と共に流れていたのです。災害を警戒し、備えていた防災バックを母はすぐさま持ち出し、私たちは地域の自治会館へ避難しました。庭まで押し寄せている土砂は私の不安をふくらませました。避難する際、私たちは土砂の上を踏み歩きました。家具や文房具、日用品が混ざった泥の上を歩く感覚は今でも忘れられません。今、思い返すと「もしも」を警戒した防災バックはとても大切な備えだと思いました。迫る土砂に対しては、素早く行動に移せるかが一番、自分の命を守るために重要なことだと避難の体験を通して考えました。

自治会館に避難した後も雨は続きました。さいわい、私と同じよう避難してきた家庭の中には私の友達がいたため（みんな無事だったんだ。）と張り詰めていた緊張感がほぐれ、不安は減りました。

「怖いね。」

「うん、すごく怖い。」

降り続ける雨に怖さを感じながらも、隣で語り合ってくれた友達のおかげで、どこか安心する自分がいました。災害時「誰かといること」それは心の支えになる大切なことだと思いました。実際に感じた心の支えを経て、もし現在の中学生である私が災害に遭った場合、避難所で取る行動は「誰かの心の支えになること」です。怖がっている小さな子や避難の際に恐怖を感じた人に声をかけて安心してもらいたいです。自分にできることを探し、実行することは避難所で求められる力だと考えました。

7月7日、朝目覚めると普段通っている道路や道が土砂の川となっていました。一歩足を踏み入れれば流されて死んでしまうと思ったほどの速い流れでした。背筋が凍り、息を飲みました。（ここは本当に天応なの。）とまるで別の世界に来たのかと感じました。普段からある光景や生活などの「あたり前」があたり前ではなかったのだとこのとき、気がつきました。

災害が発生してから2週間、私はずっと祖父の家へ滞在していました。両親と姉は復興に向け、土砂をのぞく作業をしてくれていたのです、私は妹と2人でした。

「叶愛も手伝いたい。」

そう言っても小学生の私にできることは少なく、父に反対されました。（今天応はどうなってるんだろう、友達みんなは大丈夫なのかな。）と毎日思いながら一日でも早い天応の復興を願いました。

災害が発生してから2週間がすぎた日、私はやっと自宅へ戻ることができました。嬉しさと安堵で涙を流しました。そこにはたくさんの人への「感謝」の気持ちが混じっていました。自宅へ向かう際、まだ道路や道はいっぱいの土砂が残っていました。それをたくさん大人の人やボランティアの人たちが一生懸命に取り除いてくれていました。「シャベルとって」「こっちの土砂よけるわ」とみんなが協力し作業している姿を見て、本当に、心から（かっこいい。）と思いました。今でも天応の復興に向かってくれた人への感謝の気持ちは忘れません。

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

みんなの協力が天応を復興へと導いた事は本当にすごいことだと実感しています。だから私は誰かが誰かのために行動をするすばらしさを胸に留めて、復興のシンボル、天応で暮らしていきます。